

一誌一句(受贈誌11・12月号他より)

米田 透 抄出

縁側にひとり坐りて盆の月

(四万十)

亀井雉子男

酢海鼠やわが頼もしき親知らず

(朱雀)

田中 春生

獺祭忌子規の無念を思ひ遺る

(百鳥)

大串 章

推敲の途中鳴りだす貝風鈴

(縹)

花房八重子

西行の碑へ手のひらの蝗置く

(雲取)

鈴木 太郎

ざくざくと玉砂利鳴らす菊日和

(椎)

村松 二本

人に会うことによろしさ花に鳥

(雑草)

実籾 繁

蟬しぐれ野球少年らが帰る

(やぶれ傘)

大崎 紀夫

風の声鹿のこゑ聴く古都の闇

(あすか)

野木 桃花

比叡のみお山と呼ぶよ冬紅葉

(氷室)

尾池 和夫